平岩弓枝

白萩屋敷の月

御宿かわせみ〔八〕

文春文庫

白萩屋敷の月 御宿かわせみ8

定価はカバーに表示してあります

1989年10月10日　第1刷

著　者　平岩弓枝
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-716844-8

文庫

白萩屋敷の月

御宿かわせみ8

平岩弓枝

文藝春秋

目次

美男の医者……7
恋娘……37
絵馬の文字……67
水戸の梅……102
持参嫁……130
幽霊亭の女……163
藤屋の火事……196
白萩屋敷の月……227

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白萩屋敷の月

美男(びなん)の医者(いしゃ)

一

夜明け前から降り出した雨は、そう強くもないかわりに、小半日が過ぎても一向にやむ気配がなく、そのせいか、冬が逆戻りしたような寒さであった。

天気がよければ、一日中、暖かな「かわせみ」のるいの部屋も、今日は昼間から薄暗く、針仕事でもしようと思えば、行燈(あんどん)の灯が欲しいようなうっとうしさで、るいは長火鉢に寄りかかってぼんやりしていた。四、五日前から風邪気味でなんとなく頭が重い。

「お嬢さん、甘酒、召し上りませんか」

障子のむこうから声をかけて、女中頭のお吉(きち)が筒茶碗を一つ、お盆にのせて入って来た。

湯気の立っている熱(あ)つ熱(あ)つの甘酒に、すり下した生姜(しょうが)が添えてある。るいが茶碗を取り上げた時、帳場のほうに男の声がした。

「深川の長助(ちょうすけ)親分みたいですねえ」

出て行ったお吉が、やがて浮かぬ顔で戻って来た。

「なんだか、厄介なお客さんみたいなんですけどね」
芝の増上寺の片門前に住む紫染めの職人の兄妹で、大事な用があって向島まで行ったのだが、どうも埒があかずひと晩、ここへ泊めてもらえまいかと、長助がつき添ってやって来たという。
「兄さんのほうが足が悪いんですよ。歩けることは歩けますけど、あれで芝からこっちまで来るのは、容易なことじゃありません」
「なんでもいいから、早くすすぎをさし上げなさいな。このお天気じゃ、さぞかし凍えてお出でだろうに……」
お吉を先に立てて、るいも帳場へ出てみると、もう、番頭の嘉助が女中たちに指図をして湯を汲ませ、客の汚れた足を洗わせている。
「どうも、お嬢さん、申しわけございません」
一足先に上へあがっていた長助が、人のいい顔でお辞儀をし
「ちょいと、あとから、お話が……」
目の前にいる兄妹に、少し気をかねた挨拶をした。
「さぞ、お寒かったでございましょう。すぐにお風呂の仕度をさせますので、とりあえず、お召しかえをなさいまし」
宿の浴衣に半纏を添えて、女中たちが兄妹の客を二階へ案内して行くのを見送って、るいは長助を居間へ案内した。
「あいすいません。本来なら、とても、こちら様の御厄介になれるような身分の者じゃござい

ませんのですが、聞けば聞くほど、あんまり気の毒な身の上なんで、なんとか、いいお智恵を拝借出来ねえものかと思いましたんで……」

長助の女房の実家が、あの兄妹の住む片門前に近い大門通りにある関係で、兄妹の母親と少々のつき合いがあり、それで、長助を頼って来たという。

「長助親分のおかみさんの知り合いなら、なんてことはありません。気がねなんぞ要らないから、わけというのを話してごらんなさいな」

るいが例によって女長兵衛を気どっているところへ、嘉助が宿帳を持って来た。

芝片門前、紫染め職人、左太郎、妹、おもん、と稚拙な文字で書いてある。

「あまり大きな染屋じゃございませんが、左太郎というのの親父の代からの店でして、下働きの職人も二、三人はおいて居ります。一昨年に親父が死にまして、そのあとは左太郎がやって居ります」

年齢は若いが、染め物の腕はなかなかのもので働き者でもあるのだが

「子供の時に暴れ馬に蹴られまして、足腰が不自由でございます。それで、未だに、嫁も貰わず、母親と妹のおもんと三人暮しをして居ります」

自分の女房の知り合いだけに、長助の話は要領がよかった。

「で、その、紫染めの仕事ですが、親父の代から尾張町の四条屋の品物をひき受けて居りまして、その他にも少々は注文があれば染めているようですが、いい品物は殆どが四条屋からのあつらえでして、まあ一年の大方が四条屋の仕事をしているといってもいいくらいだそうです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それで、るいが思い出した。
「尾張町の四条屋といえば、昨年の暮だかに分散をした店じゃありませんか」
分散、つまりは店じまいであった。
「左様でございます。まさか、あれだけの大店の内証が、そんなに苦しいとは近所でも気がつかなかったそうでございますが……」
一夜の中に店を閉め、倒産ときいて町中が仰天した。
「四条屋じゃ、二年も前から、左太郎のところにろくすっぽ、金を払っていなかったんでございます」
そのくせ、仕事のほうは、ここ二年ばかりおびただしい数の注文が来てそれも、急げ急げと催促され、寝る間も惜しんで期限に間に合せていたのだが、その代金を一文も払わずに、四条屋が潰れてしまった。
「でも、分散ということになれば、入札公売ということで、少しは借金の穴埋めが出来るんじゃありませんか」
るいの言葉に、長助が重く首を振った。
「いえ、それが、店は二重、三重に借金のかたに入って居りました上に、蔵にも店にも、ろくな品物が残って居りませんでしたとか」
「そんな馬鹿な……あれほどの大店で……」
「どなたも左様におっしゃるのですが、実のところ、金目のものはなんにもなかったようでご

ざいますんで……」
押しかけた債権者も驚いたが、一番、困ったのは左太郎のように、四条屋の下請けの仕事をしていた者たちで
「呉服屋でございますから、染屋の他に縫箔屋だの仕立屋、洗い張り屋に勘定がたまり放題で……」
そういうところは、どこも小ぢんまりとやっているだけに、受けた損害は並大抵のものではないと長助はいった。
「左太郎のところも、なんだかんだで十両からの未払いがございます」
「そんな大金を……どうして今までに少しずつでも払ってもらわなかったのかね」
黙って聞いていた嘉助が、たまりかねて口をはさんだ。
小さな染屋で十両というのは大金である。
「手前もそこのところを左太郎に訊いてみたんですが、四条屋では二年前に旦那の伊兵衛さんが歿って、あとはおかみさんと一人娘のお春さんでして……店のほうは前からの奉公人が切りまわしていて、どうということはなかったそうですが、なんとなく賃金の催促をしかねたような塩梅で……」
それでも、左太郎の妹のおもんが昨年中何度か尾張町の四条屋へ足を運んで、いくらかでも払ってもらいたいと頼んだのだが
「番頭の吉兵衛というのが、主人が死んで、少々、厄介なことが持ち上って支払いが遅れてい

るけれども、暮には一文残らず耳をそろえて渡せるから、それまで待ってくれるようにと申しましたそうで……」

長いつき合いの店だし、染屋にとっては大事な得意先でもある。それでも押して支払ってくれとはいえないで、おもんは帰って来たのだが、その暮に

「四条屋は分散しちまったわけでございます」

左太郎のところは、いい災難で

「今までは貯えの中から職人に手間を払って来ましたが、それも底を突き、この初春は正月どころではない有様でして……」

せめて半分でも、なんとか払ってもらえないかと四条屋へかけ合ったが、埒があかなくて、とうとう、足の不自由な左太郎が妹と一緒に出て来たのだという。

「そりゃあ、えらいことになりましたな」

嘉助が嘆息をついた時、お吉がとんで来た。

「番頭さん、いつまで油を売ってるんですか、お客様ですよ」

すぐ、出て下さい、といわれて、嘉助が出て行った。

「どうも、つまらない長話を致しまして……」

長助が具合悪そうに腰を上げかけ、るいがそれを制しているところへ

「お嬢さん、どうしましょう。今、ご案内した娘さんのほうが、お腹が痛いみたいで……」

るいが慌(あわ)てて裏階段から二階へ上ってみると、左太郎の妹のおもんが、とりあえず敷いたら

しい布団の上で蒼白になってうめいている。どうみても只事ではないので、るいは表階段から帳場へかけ下りた。

「番頭さん、すぐ、日本橋の源庵先生へ使をやって……」

慌しくいいつけているるいの目の前で、一人の若い男がすすぎをとっていたのだが

「御病人か」

雨に濡れた袴の裾を手拭で叩きながら、上りかまちへ立った。総髪で左手にちょっと大きな四角い包を下げている。

るいが顔をそっちへむけて、思わず、はっとしたのは、男の顔がどことなく神林東吾に似ていたからであった。いや、東吾というより、むしろ、彼の兄の通之進のほうが酷似しているかも知れない。

やや面長で、いわゆる眉目秀麗という容貌であった。男にしては優しすぎるようなのを、ぐいと締った口許が救っている。

「手前は医者のはしくれだが、よろしかったら、診てさし上げよう」

穏やかにいわれて、るいは少し、ためらったが、傍にいたお吉は忽ち、その気になって

「こちらなんですよ」

あたふたと二階へ上って行く。

みたところ、年は若いが、おっとりと品のいい印象なので、よもや、いい加減な者ではあるまいと思いながら、るいも後からついて行った。

部屋へ入ってからの、その男の態度は、まさに医者であった。苦しんでいるおもんを上向きに寝かせて、着衣の上から腹部を軽く圧して、痛み具合を訊ね、それから、自分の包を開けて、銀色の平たい棒のようなものを取り出して、口の中を調べた。

「腹部の痛みは、雨の中を歩いて冷えから来たもので、温めれば良いが、少々、風邪気味で、口中が赤くなっている」

熱が出るといけないからといって、紙に筆をとって、さらさらと何行かの文字を書いた。

「日本橋に天聖堂という生薬屋がある。そこへ行って、これを買って来てもらいたい」

なにがしかの金を添えて出されて、るいは恐縮した。

「とんでもございません。お金は手前共で用立てますので……」

小雨の中を下働きの若い男が走って行き、るいはお吉に指図をして部屋を更に温めさせ、行火の仕度をした。

帳場へ行って宿帳をみると、男の名前は寒井千種、長崎から江戸見物に来た医者ということであった。

「長崎ということは蘭方のお医者かも知れません」

と嘉助がいったが、やがて使が薬を買ってくると、寒井千種は、それらを自分ですりつぶし、小さな秤にかけて調合すると、お吉に一つをおもんに飲ませるようにいい、別の包を持って、るいのところへ来た。

「先程、みたところ、おかみさんも風邪のようだな」

ついでに作った風邪薬だから、飯をすませたあとに飲んでごらんと渡されて、るいは少し赤くなってお辞儀をした。

「大丈夫ですかね、あんな若いお医者の作ったものなんぞ……」

お吉は疑わしそうな顔をしたが、二階のおもんはすでに腹の痛みもとまり、薬を飲むとすやすやとねむり出したときいて

「案外、名医なのかも知れませんねえ」

と宗旨を変えた。

で、るいも夜、寝る前に服(の)んでみたのだが、一夜があけると、重かった頭がすっきりして、体のだるかったのも嘘(うそ)のように消えている。

おもんのほうも、今朝はすっかり元気になって、粥(かゆ)を二杯も食べたというので、るいが礼に行こうとすると

「寒井様なら、大川で釣りをしていらっしゃいますよ」

嘉助が笑いながら教えてくれた。先程、釣道具があったら貸してくれといって、川っぷちへ出て行ったという。

成程、雨上りの大川端の土手の上で、ぽつんと釣糸を垂れている男の姿が、かわせみの庭からよくみえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com